

《二〇一四年十一月四日開催 講演会「第3回 世界遺産から見た日本」要旨》

富岡製糸場

亀井ダイチ・アンドリユ

産は、十九世紀末期に養蚕と日本の生糸産業の革新に決定的な役割を果たし、日本が近代工業化世界に仲間入りする鍵となった⁽¹⁾と述べられている。

この登録勧告にもあるように、評価されたのは富岡製糸場のみではない。生糸産業の発展のためには、蚕の養育から蚕種の保存、その教育に関する関連施設の存在は欠かせないものであり、また世界に日本の絹を輸出する、その経路づくりも重要な意味を持っていた。

今回は、富岡製糸場を中心にその関連遺産を紹介しながら、日本の絹産業がどう発展し、どのような人々がそこに関与し、当時の世界情勢とどうかかわっていったのかについて簡単に述べていきたいと思う。

富岡製糸場の誕生とその背景

富岡製糸場が作られたのは、明治五年のことである。養蚕・

はじめに

平成二十六年六月。「富岡製糸場と絹産業遺産」が、日本で十八番目の世界遺産として登録されることが決まった。同年四月に世界遺産委員会の諮問機関であるイコモスが公表した勧告では、その普遍的価値を高く評価しており、「明治時代初期まで遡る富岡製糸場は、二つの養蚕の教育施設及び蚕種倉庫を含む関連施設とともに、伝統的な生糸生産から急速に最善の大量生産手法に到達したことを表している。日本政府は、フランスの機械及び工業の専門的知識を導入し、群馬県において生産過程システムを作り上げた。すなわち蚕種の生産、蚕の飼育、大規模な機械化された生糸生産施設という過程である。一方、モデル工場としての富岡製糸場と関連資

製糸業は昔から日本で盛んではあったものの、それまでは手動で行なう「座繰り」というシステムが主流であった。そうしたなかで、明治五年に日本で富岡製糸場という初の官営製糸場がつくられるようになったのには、当時の世界における生糸市場の動きと非常に密接な関係がある。

幕末における横浜開港により外国人との取引が活発になるなかで、日本の生糸への需要は著しく高まった。その当時、ヨーロッパでは蚕の病気が流行し、養蚕業は壊滅的な状況に追い込まれていた。また、それまで生糸の生産量では中国が圧倒的に優位であったが、アヘン戦争による混乱により、その生産が激減する。そんな状況のなかで目をつけられたのが日本であったわけである。しかし、日本の製糸業は手動であり、ヨーロッパの需要に見合うだけの十分な生産量を確保するのはは無理がある。需要に供給が追いつかないなか、粗悪品ができて、重さをごまかしたりの不正が行なわれるようにならなっていた。日本の生糸の質の悪さに困ったイタリヤやイギリスは、その原因をつかむために専門家を日本へ派遣。そこで実地調査を行なったヨーロッパからの専門家らは、日本の製糸業の現状を自分たちの母国に報告するとともに、明治政府にヨーロッパの技術を学び、器械製糸を導入することを助言する。フランスのヘクトリアアンタル商会²は、自分たちで洋式の器械工場を作ることを提案するが、外国資本の進

出を警戒する明治政府はそれを拒否。しかし、製糸業の発展が日本の発展につながることを理解した明治政府は、明治三年にヨーロッパの製糸技術を導入した器械製糸場の設立を決定する。日本初の「官営器械製糸場」は、こうした背景のもとで設立されることになったのである。

お雇い外国人

富岡製糸場の設立に大きな役割を果たしたのが、フランス人のブリユナ³である。現在、富岡製糸場内に残る「ブリユナ館」に名前が残っていることもあり、富岡に関係する外国人と言えば、まず最初に思いつく人物であろう。

明治時代に入り近代国家としての歩みを始めた日本は、欧米諸国に追いつくために外国から大勢の指導者を受け入れた。いわゆる「お雇い外国人」と言われる人々である。ブリユナも、その「お雇い外国人」の一人であった。当時大蔵少輔であった伊藤博文と租税頭であった洪沢栄一は、政府の命を受け、在留していたフランス人のチブスケ⁴とヘクトリアアンタル商会のカイセル・ハイメルを仲介として、日本で初めて設立する官営の製糸場の指導者として相応な人物を推薦してもらうことにした。そこで白羽の矢が立ったのが、同商会の優秀な生糸の検査官であったブリユナであったのである。

ブリユナはその大任を引き受けるに際し、まず日本在来の

製糸方法を勉強した。その結果、ただフランスの製糸技術をそのまま日本にとりいれるのではなく、日本在来の製糸方法をヨーロッパの先進技術で改善させることにし、母国のフランスで日本に合う製糸器械を特注する。富岡製糸場の建設に先立ち、機材の購入や技師の雇用のために一度フランスへ帰国したブリユナは、フランス人の技師と工女を四人連れて横浜に戻ってくることになる。彼らも同じく「お雇い外国人」ではあったが、給与にはかなりの差があった。^⑤ブリユナの給与は、当時の金額にして大臣級の額であったという。ブリユナがかなりの高待遇を以て迎えられたことは、富岡製糸場のなかに現在も残る「ブリユナ館」のつくりからも容易に推察できる。住居スペースはかなりの広さがあり、地下にはワイン蔵も作られていた。

ブリユナの雇用期間は五年。その他の工女らの雇用は四年間の約束となっていたが、病気になったりして雇用期間中に富岡を去っており、雇用期間満期まで富岡にいたフランス人は、ブリユナのみである。^⑥

こうして、ブリユナをはじめとするフランス人技師や工女の手を得て作られていった日本最初の官営の器械製糸場だが、なぜ富岡の地が選ばれたのか。そこには、次のような理由があったという。

- ① 養蚕が盛んで、生糸の原料の繭が入手しやすい
- ② 交通の便がよい
- ③ 動力源となる石炭および水が豊富
- ④ 大きな工場を設立できるぐらいの土地が供給可能
- ⑤ 外国人指導の工場設立に対する地元の同意^⑦

養蚕技術の改良にむけて

蚕という漢字は「天」と「虫」が合わさってできており、文字通り「天の虫」とも呼ばれたほど貴重な存在であった。非常に繊細な虫であり、ちょっとしたことで病気になるや、く蚕を育てても、病気のために全滅になってしまうということもあったため、よりよい飼育方法を求めて、いろいろな工夫が重ねられていた。

富岡製糸場とともに絹産業遺産構成資産として登録された「田島弥平旧宅」は、そうした養蚕技術の改良を今に残す建物である。ここには現在も田島弥平氏の子孫が在住しており、一見したところでは地方によくある住宅と何もしらぬ感じが受けるが、屋根部分に注目すると、この住宅が世界遺産の構成資産のひとつとなった理由が分かる。屋根には「総檜^{（そうひのき）}」と呼ばれる形式の風通し口がついているのだが、これは住宅の二階部分に蚕を飼育する場所を設け、換気を効果的に行な

い、蚕にとってよい飼育環境を作り出すためのしくみなのである。そして、このしくみを作り出した人こそが、当時この住宅の主であった田島弥平。もともと有力な蚕種製造農家であった弥平は、蚕の飼育には通風が重要であるとして、「清涼育」と呼ばれる方法を大成させた。弥平自身とその父親の実践に基づいて編み出された新しい養蚕技術は「養蚕新論」「続養蚕新論」という二つの本にまとめられているが、その本の最後に弥平は「きつと得るものがあるから、文章がヘタだからといって捨てないように」と書き記している。これらの書籍によって「清涼育」は各地に広まり、近代養蚕農家の原型となっていた。

「清涼育」が広まっていったとはいえ、養蚕は農家各自で行なうのが基本であり、統一した管理化がなされていたわけでもない。農家にとっては大切な資金源でもある養蚕がうまくいくようにとの願いを込めた当時の人々の思いは、「蚕の神様」を祀る神社や祠があちこちにあったことから分かるであろう。

しかし明治十年ごろ、現在の藤岡市高山あたりの村では、村のあちこちにあったそうした蚕をまつる神社や祠が一つにまとめられてしまい、養蚕に携わる人々が日常的に祈ることが難しくなってしまう。それを決めたのは、高山長五郎という人物。「天の虫」とも呼ばれた蚕。その繊細さゆえに飼育

の難しさが課題となり、ひとつの支えであった養蚕の成功を日常的に祈るという行動が、蚕の神様を祀る神社・祠をまててしまうことにより困難になったのだから、蚕はうまく育たなくなるといふ恐れが当時の村人たちの間に生まれたことは想像に難くない。しかし、蚕は元気に育った。村人たちの恐れとは反対の結果がもたらされたのである。

つまり、高山長五郎は、蚕の飼育に必要なのは神頼みではなく、その飼育に適切な環境を整えることだという科学的な論理を、神社・祠の統合によって養蚕農家に示したのである。明治三年ごろ、高山は蚕を育てる人たちによる組合「高山組」をつくり、弟子たちに自分の養蚕方法を教えながら、蚕にとってよりよい飼育方法を求めて共同研究を開始した。そうして長五郎が完成したのが「必要最低限の火力による保温と換気のみ」を基本にした「清温育」と呼ばれる飼育法であり、これは近代日本における養蚕の基準ともなった。高山長五郎は、明治十六年には繭や生糸のさらなる品質向上をめざして「清温育」を広く教える「養蚕改良高山社」を設立するが、そこには日本各地から多くの人々が学びにやってきた。また、日本国内だけではなく、朝鮮からも実業団がやってきて、その方法を学んでいる。

この「高山社」も、「絹産業遺産」として富岡製糸場とともに世界遺産に登録された遺産のひとつである。農民の組織

から私立の養蚕学校へと姿を変えながら、「高山社」は昭和五十二年までその役割を果たし続けた。

蚕種の改善と保存

よい生糸をとるためには蚕を元気に育てることがもちろん重要ではあるが、蚕そのものの品種も大きく影響する。蚕の品種は明治時代後半には一〇〇〇種類以上あり、糸の質に違いがあったため、それを混ぜてしまうことによって不揃いな生糸ができてしまう害を招いていた。そのため、よい生糸をとるために在来種のなかから優秀な品種だけを選ぶ、という方法が長いこと続けられていた。

しかし、イタリアやオーストラリアなどの外国で蚕の交雑種がさかんに飼育されていることをうけ、日本でも交雑種の研究がされるようになった。その一つの例として、日本の在来種である小粒の繭「小石丸」と中国種を交雑させてつくった「新小石丸」という種がある。日本がこうした外国種との交雑に本格的に取り組んだのは明治四十三年以降だが、その当時富岡製糸場を有していた「原合名会社」は、その翌年から外国種と在来種の交雑の試験飼育を始めている。

ところで、皆さんが「富岡製糸場」といって最初にイメージするものといったら何だろうか。門を入った正面に見える、レンガ造りの細長い建物ではないだろうか。この建物の写真

はあちらこちらの観光ポスターにも使われており、富岡製糸場のシンボリックな建造物であるが、これがどんな役割を担っていたか、それを知っているだろうか。

この建物は「東繭倉庫」と呼ばれている。そしてこの「東繭倉庫」と対をなす形で、同じようなレンガ造りの細長い建物が、製糸場の敷地のやや奥まった場所にある。それが「西繭倉庫」である。富岡を観光で訪れる人のなかには、こちらの「西繭倉庫」のほうまでは見に来ない人も少なくないが、この西繭倉庫とシンボリックな東繭倉庫の一对は、富岡製糸場の敷地のなかで最も大きな部分を占めている。なぜ、これだけの大きな繭倉庫が必要だったのだろうか。

蚕の卵は、基本的に春に孵化する。ということは、蚕を飼育する養蚕作業も、春にしかできないということになる。他の季節に蚕を孵化させ養蚕をしようとしても、それは無理であり、実質、富岡製糸場ができた明治の初め、養蚕は一年に一度しか行なわれていなかった。そのため、途中で繭がなくなったりしないよう、製糸場には大量の繭を蓄えておく必要があったのである。⁽⁸⁾

明治二十六年、富岡製糸場が民間に払い下げになったとき、落札したのは三井だったが、そのときの落札金額は当時の価格で十二万一千四百円。現在の価値に直すと、軽く十二億を超える。しかし落札当時、繭倉庫には八万円分の価値の繭が

入っており、実質、三井は四万円程度で富岡製糸場を落札したことになる。

富岡製糸場にはそれだけの価値の多量の繭を保存できる繭倉庫があったが、可能であれば蚕の卵を冷蔵保存し、孵化時期を調整できればそのほうが安定した供給のためには望ましい。しかし冷蔵庫のない時代。冷蔵保存をしようと思ったら、どこか自然のなかで冷たい場所を選ばねばならない。目をつけられたのが、世界遺産構成資産の最後のひとつ、「荒船風穴」である。ここは、岩のすきまから夏も冷たい空気が吹き出している。一番寒い二月ではマイナス七・八度、暑い夏でも二・七度。そこで、冷たい風が吹き出す場所を囲い、そこに建物を築いて冷たい空気を閉じ込めた「天然の冷蔵庫」を作ったのである。それが明治三十八年のことであった。

こうした風穴を利用した貯蔵所は他にも作られたが、この荒船風穴の蚕種貯蔵能力は、当時全国でもトップであった。蚕の卵はとても小さく植物の種のようなもので、紙に付けて取引されていた。荒船風穴では、こうした蚕種紙が百万枚貯蔵可能であった。全国のほとんどの都府県から委託の依頼があり、大正十一年には現在の北朝鮮にあたる地域からも依頼があったことが分かっている。⁹⁾ 荒船風穴蚕種貯蔵所が事業拡大を図る様子は、当時の広告からも見て取ることができる。富岡製糸場もこの荒船風穴に蚕種の貯蔵を依頼しており、大

正七年に預けられた蚕種紙は五六一七枚だったという。

一年に何度も蚕糸の収穫を可能にした風穴の貯蔵庫は、糸の生産性を向上させ、日本の養蚕・製糸業の発展に欠かせない施設であった。こうした風穴を利用した蚕種貯蔵所がその役目を終えたのは、電気冷蔵設備が普及した昭和十年ごろのことである。

ここまで簡単に「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成遺産を見てきた。富岡は「日本最初の官営器械製糸場」であったが、「最初の器械製糸場」ではない。日本最初の器械製糸場は、前橋藩営の前橋製糸所であった。富岡製糸場と異なり、残念ながら前橋製糸所は小さな記念碑以外その跡を残すものはないが、この製糸場が操業を開始したのは明治三年、富岡よりも二年も前のことである。規模としてはとても富岡にかなうものではなかったが、器械製糸技術の全国的普及の最初の拠点として、富岡にも大きな影響を与えている。

この前橋製糸所をつくったのは、速水堅曹¹⁰⁾。富岡製糸場ではフランス人のブリュナを指導者として雇い、フランス式の器械を導入したが、速水堅曹はスイス人技師を四カ月雇用して技術を学び、イタリア式の製糸器械を導入している。¹¹⁾ この速水は全国の製糸所の技術指導・器械製糸の普及に貢献している。この製糸所に伝習に来て技術を身に付けた熊本の長野

溶平と親戚夫婦らは、西日本最初の器械製糸場「緑川製糸場」を明治八年に設立している。¹²⁾また富岡製糸場の成立にあっても、政府役人とプリユナが富岡を訪れたとき、速水は政府により富岡行きを命じられ、藩営製糸所の経営者の立場から、器械製糸の利害について意見を述べるように求められている。速水自身とプリユナは親しかつたらしく、なにかと連絡を取り合っていたという。¹³⁾

また速水は富岡製糸場の三代目の所長となり、当時質が落ちていた富岡製の絹糸のために、いろいろな改革を行なっている。そのうちのひとつが、工女たちに対する教養教育である。仕事を通して工女の人間的向上を支援することで、工女のやる気をあげ、生糸の質向上に結び付けた。それが成功したころ、速水は主な輸出先のフランスに文書を送り、「私自身が担当して製造した品が、いささかでも悪い点があれば、知らせてほしい」と申し送っている。¹⁴⁾そして、富岡が官営であることの限度を見抜き、民営化の必要を言い出したのも、この速水である。

また富岡製糸場が操業を開始してからわずか五年後、やはり官営の画期的な工場が作られている。それが現在の高崎市新町に作られた「新町屑糸紡績所」である。屑糸紡績とは、製糸に向かない屑の繭や屑の糸をつぶして糸に紡ぐことをいう。当時のヨーロッパでは、屑の繭や屑の糸も製品に仕立て

る技術が確立していた。こうした屑はどうしても一定の割合で発生するため、これらを加工に回せるかどうかは製糸業にとって、生産と効率の両面から大きな課題であった。

日本ではほとんどタダみたいな値段で売られている屑糸や屑繭が、ヨーロッパでは高い値段で取引されていることを知った日本政府は、この紡績工場を作り、その利益を日本に取り戻そうとしたのである。この「新町屑糸紡績工場」は、日本が初めて自力で建設した近代工場である。その開業式には、大隈重信、伊藤博文、前島密、松方正義ら政府高官が参列し、翌年には明治天皇が八千人の随行員を伴って行幸している。大久保利通は開業式の挨拶で「既住の無価を転じて将来の有利と為し、その利を邦人に附せんとす」との祝辞を述べている。¹⁵⁾そして明治二十年には、富岡製糸場と同様、三井に払い下げられた。

明治政府が養蚕・製糸業に力をいれた理由は、その時代、生糸が日本の主な輸出品であり、最も効果的に外貨を稼ぐことができる商品だったからである。しかし生糸の輸出でもうけを出すためには、色々な問題があった。

明治七年に、自宅を利用して民間初の洋式器械製糸所を作った、星野長太郎という人物がいる。この星野が、自分の製糸所で作られた生糸のなかでも特に優良なもの始めて出荷し

たときのことである。その生糸の質のよさについては、生糸を外国の商人に売る役割をしていた「荷主」たちにも高い評価を得たが、星野の利益はマイナスに終わった。なぜそんなことが起こったのだろうか。

その理由は、生糸の販売流通経路にあった。外国の商人に売るために「荷主」に頼むと、当然その仲介料を取られる。それを知った星野は自分自身が横浜に向き、英国商人にこそこよい値段で売ること成功するが、それでももうけはほとんどないに等しかった。横浜からイギリスまでの流通段階で、仲介人や外国商社にも運賃や税や手数料をとられてしまうからである。

仲介業者に売るだけでは、外国との貿易で利益を生み出すことはできない。自分たちの製品が「どこに出荷され、どのような経路で、いくらで売られるのか」をきちんと把握する必要がある。しかし、当時の外国商人たちは、日本の業者たちに何の情報も知らせないようにしていたため、日本側は外国人商社のいうことを鵜呑みにするしかなかった。しかし、星野は前橋製糸所の速水を通じ、貴重な情報を入手する。それは、「外国において、日本の生糸は横浜の外国人商社が言っているよりもはるかに高い値段で取引されている。」という事実であった。

そこで星野は、外国人商社を通さずに生糸を直輸出するた

め、英語を勉強していた弟・新井領一郎をアメリカに派遣し、アメリカ市場における生糸の需要とニーズを把握することにした。それが明治九年のことである。領一郎の信用を第一とした交渉はアメリカ市場において好意的に受け入れられ、日本人として初めて外国人商社を経由せずに生糸を直輸出することに成功する。これにより、日本の生糸貿易は著しい発展を見せるようになり、また同時に、生糸の輸出先についても変化が見られるようになっていく。

新井領一郎が渡米する前、日本の生糸の輸出先は九九パーセントがヨーロッパであった。しかし領一郎が本格的に「直輸出」を開始してからアメリカ向けの輸出が増加。明治十八年には輸出先の五八パーセントをアメリカが占めるようになり、ヨーロッパへの輸出の比率を逆転する。そして明治四十年には、七〇パーセントまで増えるようになった。

新井領一郎が拓いた「直輸出」の道筋は、こうしたアメリカへの輸出拡大の大きな理由のひとつであったことに間違いないが、すべてが日本側の努力にのみよるものではない。当時のアメリカの状況も考えねばならない。新井の渡米より十数年前に起こった南北戦争（一八六一〜六五）の後、アメリカでは産業都市バタワソンを中心に絹織物業が興隆し、多量の生糸を必要としていた。また、アメリカの絹織物業者の労働者の賃金は高く、輸入される生糸には関税がかけられ

ていなかっただため、絹織物の原料である生糸は、すべて国外からの輸入に頼っていた。当時、アメリカが主に生糸を輸入していた国は中国であったが、アメリカ側のニーズを的確に掴んだ新井領一郎によって、一八八三年には中国より日本から輸入する生糸の割合のほうが多くなったのである。

この新井領一郎が渡米したとき、彼は二十歳の若さであった。領一郎の渡米に関しては多くの有力者がいろいろな手助けをしているが、そのなかの一人が群馬県の県令であった楫取素彦である。楫取は領一郎に対して渡航費の支援を行なっているのだが、その御礼のために領一郎が楫取のところを訪れたとき、楫取の妻・寿子は紫の織物に包まれた細長いものを領一郎の前に差し出して、次のように言ったという。

自身は寿子の兄、吉田松陰の形見です。この短刀には兄の魂が込められています。その魂は兄の夢であった太平洋を渡ることによってのみ、安らかに眠ることが出来るのです。

吉田松陰の名前は、幕末や明治維新の歴史が好きなお人であれば知らない人はいないであろう。また平成二十七年のNHK大河ドラマ『花燃ゆ』の主人公「杉文」は、この新井領一郎に松陰の刀を渡した寿子の妹である。領一郎が寿子より

預かったその吉田松陰の短刀は、現在カリフォルニアに住む新井の子孫の手に受け継がれているという。また領一郎の長男・米男は明治二年の生まれだが、アメリカ東部で生まれた最初の日本人でもあった。

現代社会と「絹産業」

富岡製糸場が操業を開始した年からさかのぼること一年前の明治四年。明治天皇の皇后であった昭憲皇后が、近代国家へ歩み始めた日本の基幹的な産業となる養蚕業の奨励のために、皇室で養蚕を始めた。昭憲皇后と、明治天皇の父である孝明天皇の准后英照皇太后は、富岡製糸場が操業を開始した翌年の明治六年六月に富岡を訪問しており、そのときの記念碑は今も製糸場の敷地のなかで見ることができる。皇室での養蚕は歴代の皇后に継承され、国内の養蚕業が衰えた今でも、その伝統は大切に引き継がれている。

皇室で育てられている蚕のなかには、純国産の「小石丸」という種類がある。この種類の蚕は、そこから作り出される糸の美しさにより高い評価を得ていたが、生産性が低いため、昭和の終わりごろには皇室でわずかに育てられているだけで、遠からず廃棄される見込みになっていた。しかし、この蚕からとれるタイプの絹糸が八世紀の正倉院宝物の古代裂・紫地鳳唐草丸文錦の復元に欠かせないものであることが明らかに

なり、平成六年からは増産されることになった。復元事業が完了したのは平成二十二年のことだが、それまでの十六年間、小石丸の繭は皇室から正倉院に贈りつづけられたのである。

また日本の発展を支えた絹産業の跡は、形を変えて私たちの生活のごく身近に存在している。例えば、さいたま新都心駅前にあるショッピングセンター、「コクーン新都心」。なぜこのショッピングセンターに「コクーン」という名称がつけられているのか、それは cocoon が日本語で「繭」を意味する言葉であることが分かれば、見当がつくのではないかと思う。このショッピングセンターができる前、ここは富岡製糸場を近年まで所有していた片倉工業の所有する、有力工場のひとつだったのである。絹産業の衰えによりこの場所はショッピングセンターとして新たに生まれ変わったものの、その名称には富岡製糸場につながる絹産業の名残が残されているのである。

註

(1) 平成二十六年四月二十六日の文化庁報道発表「我が国の推薦資産に係る世界遺産委員会諮問機関による評価結果及び勧告について」。

(2) この他、「エシユト・リリアンタール」や「ヘクト・

リリアンタール商会」などの表記がある。本稿での表記は『富岡製糸場誌』による。

(3) Paul Brunat。彼の名前の発音に関してはいくつかの表記があるが、ここでは国立文書館蔵の公文書での使用頻度を元に「ブリユナ」とした『富岡製糸場誌』に倣い、「ブリユナ」とする。

(4) DuBousquet。

(5) 『御雇外国人一覧』（近代デジタルライブラリー）中外堂、一八七二年、五頁。

(6) 志村和次郎『絹の国を創った人々』（上毛新聞社事業局出版部、二〇一四年）、一〇六頁。

(7) 反発が懸念されたが、三〇〇人を超える戸主の名で「異存の儀毛頭ナク候」という同意書が提出されたという（上毛新聞社編『絹の国拓く——世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」』上毛新聞社事業局出版部、二〇一四年、三一頁）。後述するように、前橋製糸所に雇い入れられた外国人への誹謗中傷もあったため、外国人雇い入れに関する点は、富岡製糸場設置場所選定の際にも議論の対象となった（『富岡製糸場誌 上』富岡市教育委員会、一九七七年、八頁）。しかし現実的には違和感もあったらしく、日本人宅へ居留を命じられていた「お雇い外国人」の西洋料理の匂いが甚だしく、それが養蚕

- には害だと苦情を唱えた女性がいたことが、明治五年六月十九日付の『東京日々新聞』掲載の記事から分かる。
- (8) 佐滝剛弘『日本のシルクロード——富岡製糸場と絹産業遺産群』（中央公論新社、二〇〇七年）、一〇〇頁。
- (9) 前出『絹の国拓く』、一〇二頁。
- (10) 速水は、後に三代、五代の富岡製糸場長となっている。
- (11) 雇い入れたスイス人技師の名は Caspar Muller。工場の狭隘さや外国人雇入に関する非難および流言飛語のため、四カ月の雇用期間満了に伴い、解雇された。富岡製糸場誌編さん委員会編『富岡製糸場誌』（上下、富岡市教育委員会、一九七七年）、八頁。
- (12) 志村和次郎『絹の国を創った人々——日本近代化の原点・富岡製糸場』上毛新聞社事業局出版部、二〇一四年、一一八頁。
- (13) 前出『絹の国を創った人々』、一一二頁。
- (14) 前出『絹の国を創った人々』、一二三頁。
- (15) 前出『絹の国を創った人々』、六三頁。
- (16) ハル・松方・ライシャワー、広中和歌子訳『絹と武士』文藝春秋、一九八七年。

参考資料

- ・『御雇外国人一覽』（近代デジタルライブラリー）中外堂、一八七二年
- ・富岡製糸場誌編さん委員会編『富岡製糸場誌』（上・下）、富岡市教育委員会、一九七七年
- ・ハル・松方・ライシャワー、広中和歌子訳『絹と武士』文藝春秋、一九八七年
- ・石井寛治『日本経済史』（第二版）東京大学出版会、一九九一年
- ・今井幹夫『富岡製糸場の歴史と文化』みやま文庫、二〇〇六年
- ・佐滝剛弘『日本のシルクロード——富岡製糸場と絹産業遺産群』中央公論新社、二〇〇七年
- ・志村和次郎『絹の国を創った人々——日本近代化の原点・富岡製糸場』上毛新聞社事業局出版部、二〇一四年
- ・上毛新聞社編『絹の国拓く——世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」』上毛新聞社事業局出版部、二〇一四年
- ・Reischauer, Haru Matsukata. *Samurai and Silk: A Japanese and American Heritage*. Belknap Press, 1988.